

山東京伝の天明三年の黄表紙

— 新資料『客人女郎』翻刻 —

浜 田 義 一 郎

さきごろ、長崎県平戸の松浦史料博物館の蔵書の中から、山東京伝のこれまで知られなかった『客人女郎』という二冊物の黄表紙を発見したので、『日本古典文学全集』月報9号に簡単な報告をしておいたが、このたび同館のお許しを得てこれを翻刻し、またいささか贅言をそえることとした。

いま「これまで知られなかった」と書いたが、本稿を草するについて京伝の天明四年作『他不知思染井』を再読したところ十丁表に「きょねんは客人女郎といふほんがでんしたねへ、わつちらが事をつづりんしたよ」という詞のあるのに気が付いた。この黄表紙らしからぬ変な書名では、これまで研究家から見すごされたのも当然だが、これによって天明三年の作であることも確認できるわけである。また、この天明三年は、従来の研究では、前年の黄表紙評判記『岡目八目』（四方赤良）で京伝の『御存商売物』が青本総巻軸に推されたのだから、当然活潑な作品活動をしそうなものだが、意外にも一作もない年とされていたから、これを自画作の黄表紙が一部あると訂正しなければならぬ。『客人女郎』はそのような意義をもつ作である。

まずこの異様な題名は、京都の浮世絵師として名高く江戸の石川豊信や鈴木春信にも影響を与えたといわれる西川祐信の『百人女郎品

定』（享保八年）をもじったものである。表紙は普通の黄表紙とちがいで薄い紙に黄褐色の一色摺をしたもので、地の模様は桜草と銀杏鶴、すなわち富本豊前太夫の紋が白抜きになっている。これにつけて連想されるのは『桜草野辺錦』（三冊、宿屋飯盛作、勝春林画。帝国文庫黄表紙百種に翻刻、但し題名は両国名取となっている）と『豊前両国名取』（三冊、ホコ長作、春英画、江崎屋板）である。ともに二代目富本豊前（前名午之助）の人氣を当込んだ際物の袋入で、柳橋界限の豊前ファンの芸者たちの献身的奮闘によって、土佐節・義太夫節などからの攻撃を圧倒するとか、あるいは水銀を吞ませる陰謀を看破するとかいうような筋である。野辺錦の序に天明三年六月とあるから、そのころの巷説に拠ったものであろう。したがって『客人女郎』の出版もそのころと思われるが、富本一辺倒でない点で両作と異なり、あるいは少し遅れて出版する関係で行き方を変えたとも解される。そしてこれは上下二冊、柱題は「にせ川」とある。いうまでもなく西川のもじりである。板元はおそらく葛屋重三郎であらう。

さて筋は、京の六条数珠屋町にすむ白後という大和絵師（論語にある、絵ノ事ハ素キヲ後ニスにちなむ名）は江戸の錦絵や草双紙を見て北尾重政・勝川春章・鳥居清長の絵に感銘を受け、恋川春町や朋誠堂喜三二の戯作に興味を唆られて、東へ下って画道の名をあげたいと

願い、神仏を祈って満ずる夜に異形の神から千両さずかり、江戸へ下った（この辺は恋川春町『其返報怪咄』に似た趣向）。江戸の滝花町（橋町のもじり、処女作『開帳利益札遊合』に既出）に家を構えて、江戸で高名な太鼓持五通（吉原の大坂屋五丁のもじり）と心安くなり種々の指導を受けるが、薬研堀不動の縁日の日に江戸の芸者を見、さらに舟で吉原へ行く。中の町の茶屋いねや（京伝の他の作にも出ている字いせ屋のもじり）を経て松が屋の瀬山（松葉屋の瀬川）を買って夢中になり、月見を三夜引受けて鳥山大尺以来の豪遊をした。それまでの諸入用の合計が九百九十九兩二分で、残る所わずか二分（富本節の「契情恋飛脚」を利かし、また、冒頭の六条数珠屋町に照応）、上方へ帰る路用もなく茫然としていると再び神々が現われて、すべてが夢とわかった。その後は画道に精進して、にせ川すきのぶと改名し、客人女郎という書を編んだが、やがて後編をお目につけよう——という簡単なもので初心者が通の講釈を受けながら猪牙で吉原へ行くという、洒落本の常套的な筋立の前後に、若干つけ加えたにすぎない。

富本については右の富本節の暗示と、柳橋の太夫すなわち豊前の錦絵の評判を五丁オの芸者たちにさせたのと、前年の九月に松葉屋の遊女たちが中村座へ観劇に行った時「ひいきの太夫さん」おそらく豊前が出ないで落胆したという談話があるだけで、作者京伝のねらいは前記の大坂屋五丁などの吉原者、松葉屋の瀬川をはじめとする遊女たち、ゆき成（月成、朋誠堂喜三）、葛屋重三郎、さんこう（北尾政美）などの文芸関係者、そのほかすべて京伝が吉原で接触する人々を登場させ、あるいは話題にすることにあったようである。かれらの多くはやがて『総籬』その他に頻りに登場するが、それだけにこの作には洒落本的気分がきわめて濃厚である。このような洒落本的な写実は黄表紙には避けるべきだとするものが、この前年に京伝の『御存商売物』を年間最優作に推した四方赤良の黄表紙観だったが、ちょうどその反対の方向へ京伝は第一歩を踏み出したわけである。この作ではまだこなれていないが、二年後にはその才能を十全に発揮した『江戸生艶氣

樺焼』を生むべき方向である。

天明元年の絵草紙評判記『菊寿草』には絵師として、北尾重政、鳥居清長、つぎに北尾政演を挙げている。安永七年の処女作『開帳利益札遊合』以来四年間に、松村・鶴屋・いせ治・葛屋・岩戸屋などから出る黄表紙にえがいて、二十一歳の京伝はすでに職業絵師としての地歩をかためていたのである。そして政演の絵について『菊寿草』には「古道具屋の画よし」（『運附太郎左衛門咄』）、「芝居のさじきのうしろのていと、せり出しの絵は出来ました」（『其後瓢様物』）などの評があるが、洒落本のようにうとうとし、と非難された面（『七笑顔当世姿』）もある。『菊寿草』における四方赤良の黄表紙観を総合すると、

「当世」であることと、地口・口合や名言（警句）などの「言葉の花」は不可欠だけれども、「草双紙は子供の見るもの」という伝統を忘れるべきでない。したがって「近年はしゃれがうとうとし」とあるように、小味な洒落本めいたものは排すべきであり、かえって市場通笑のような古風で幼稚な教訓を高く評価するのである。そしてこの年の総巻軸は京伝の後輩北尾政美画の『桃太郎一代記』であった。桃太郎が鬼が鳥を無血で征服して魚釣を楽しみ、また江戸から鬼の芸者を呼んで舟遊びをするとか、帰国のち宝物を帝に献上して任官し結婚するとかいうほかに他奇のない桃太郎の咄を、ゆったりと五冊物にしたかなり退屈な作だが、これを敢えて推賞したのは、「それ絵草紙は大のなぐさみ草にして、よろづの子宝の教えともなるべきを、めったむせうに大通々々とて、間男の手引、女郎買の伝授、芝居の穴知り、憎まれ口のしゃればかりし」をならべたがる黄表紙界の通弊への警鐘という意味であった。

翌二年の稗史評判『岡目八目』にはその効果があらわれたためか、非難の評が少く、「所々に唐詩選の詩が見へうつとしい」「通すぎで、三味線なしに河東をかたるやう」というのがある程度である。そして京伝の『御存商売物』が総巻軸大上上吉に据えられて「おかしい」「出来ました」「こまかい」「古今の大出来々々々、画なら作な

ら、お絵にかなぼん」と絶讃されたのである。室町以来の古風な異類合戦の形で、当世の江戸の絵草紙・読物の形勢をとりあげて「言葉の花」をつくした、いかにも赤良好みの模範答案だったのである。

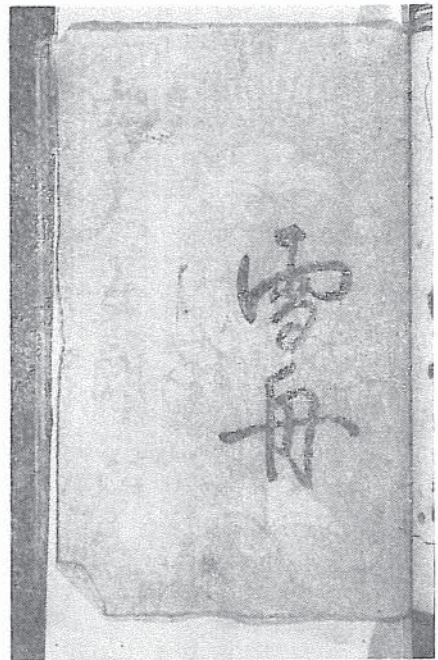
京伝は先輩をしのぎ、また前年の北尾政美を上回る榮譽を得たのだが、彼の今後の活動から見て、このような作風が彼の才能に適した場でないことは明らかである。天明元年の『其後飄々物』の作者王子風車は京伝の仮号と思われるが、『菊寿草』には「万菊と高麗蔵と勘三郎がおない年などの芝居通、こまかい事」と気の利いたうがちを褒めている。このような都会人的な機智と観察とは京伝の生得のものであり、またこの作には吉原の扇屋や中の町の茶屋もあらわれて、当時すでに大門前の蔦屋重三郎と親しいことが知られ、京伝独特の吉原文学の体勢は早くもできていたのである。したがって四方赤良から鬼に金棒と激賞され、将来の活動を期待されたことは、京伝の重荷になった感がないではない。引続いて作をするとしたら、第二の模範答案でなくてはならないという意識が、天明三年春の新版の執筆を阻んだかもしれないのである。その代り彼は九歳年長の鳥居清長が大判錦絵に大活躍をはじめたのに刺激されて、政演一代の力作というべき『新美人合自筆鏡』に取組み、背景や点景の末にまで鋭い神経を張り巡らし、文学的機智を鑲めたのである。そこへまたま富本豊前の人気に応える際物の依頼を受けたのを利用して、豊前を若干そっちのけにした形で腹ふくるる思いを癒したのがこの『客人女郎』であるとわたしには思われるのである。

『客人女郎』執筆の前後に京伝は四年春新板の黄表紙を画作したはずだが、中で『他不知思染井』だけは「京伝妹十四歳小女黒鷲式部」の作としている。その理由も従来研究家が疑問としたところである。『客人女郎』が巻末に予告した後編はすなわちこの作であるだけに、雁金五人男と吉原を組合せて、松がね屋の清川（瀬川）、ぎん山（りん山）をはじめ吉原の実在人物のうがちをたっぷり盛り込んだ同傾向の作品である。もちろん十四歳の少女とは無縁の世界であって、作者が

京伝であることは誰の目にも明らかである。げんに天明四年の黄表紙を評した『江戸土産』（宿屋女房移乗）も「作者は女の事ゆへ、廊中の事は聞き取り計りとの書入れたが、末の方へいって、だいぶくわしい事」と矛盾を指摘している。そして黒鷲述とした序には、喜三門人亀遊女の前例をもち出しているが、地位経歴のはるかに違う喜三二の故智にならったように言いなしたのは、表面の辞令としか思えない。おそらく、その場かぎりの際物ならともかく、正月新板の正規の黄表紙に吉原色のきわめて濃厚なものを、しかも五人男の一人として京伝自身が登場し、吉原の遊女と結婚することで終るこの作を、京伝の名で出すのは憚られるという論理が、この時点においてもなお彼の心中にあったのではないか。この年の他の作『郭中丁子』にはてふし大尽（秋田藩の留守居佐藤晩得、俳名朝四を暗示）『不案配即席料理』には万里や五丁などを出して、いずれも吉原と無縁ではないが、濃度がちがうからこれには京伝の名を署したのではあるまいか。

このような想像の当否はともかく、天明二年の『御存商売物』と同四年の『他不知思染井』の黒鷲式部の謎との中間の楔の位置を『客人女郎』が占めることは事実であり、出来栄という点では穿ちに偏して滑稽に乏しく習作の域を出ないけれども、京伝の吉原物の出発点という意味をもつことは認めてよい。そしてもうひとつ、黄表紙界は赤良の期待した方向には進まないで都会的洗練をよるこび、とくに天明四年からは楽屋落が流行して仲間内の文学という傾向を強めるが、『客人女郎』ははからずもその先駆けをしたといつてよい。

なお、この作の板本は後に鶴屋の手に渡り、寛政十年に念入りにも芝全交の遺作と銘打ち『素後壯雪信』と改題出版されたが、天明の作たることを示す文字を削って、そのために文意の通らぬものになっている。これと同じ題簽（小学館『日本古典文学全集』46所収「黄表紙題簽一覽」参照）で恋川春町その他の作があるが、老舗鶴喜の出版物にもこのような悪質な例があるから警戒を要するということを、老婆心ながら申し添えておく。



一オ

〔一オ〕 京の六条じゆずや町、梅川が親里の東となり到大和絵師白後といふものあり。朝夕のけぶりよふくに、千早ふる紙子にて夜寒をしのぎ、つねに身の上をはかなきことに思ひてくらしけるが、近年あ

づまより錦絵草双紙などのぼる。北尾の風流、勝川の似顔、清長の当世に目をおどろかせ、はる町喜三二の戯作にそのおもしろさうら山しき事に思ひ、何とぞあづまへ下り画道の名を上んと思ひ立けれ共、用意のたくわへともなく、日なしの掛け銭にばかり追はれ、大屋のぶつくさこゝとは耳に絶へず、あか仲でも打つたらくと思へ共、是ともあてのなき事ゆへ、今は神仏をいのるより外なしと七日が間いのりけるに、満ずる夜異形の神こつぜんとあらはれ給ふ。

注。めくりカルタの用語。天明四年『こつちの四時』にも「しいなどふしの赤仲とサ、突ぬけを打つても私の付カネエのだ。」

〔絵〕 京の白後の部屋。



一ウ

〔一ウ〕 「東西」これはしたり、善哉「われは是といつたらゑんま様だと思はうが、われは八百万神の飛脚のおかしら韋駄天の子ぶん、早合点、うなづき天、のみこみでんといふ三神なり。なんぢ活なる気性有といへども、生得いも掘なる事をふびんに思しめし、八

百万神の命をうけ今一千両の金をあたうる間、是にてのぞみを叶へべし。しかし必ず外へは沙汰なしにしてくれろ、金の入ねがい此方が続かぬ。出雲の大社の参会も、芸者といふ所も儉約でよふく小座敷で四文にげくらの楽しみなれば、神々もはなはだ困窮なり」千両箱をまくら元へ置きて消へ失せけるぞ乙のよき。此とき白後はあら有難やとい、しより、有がたいといふ枕ことばに千両とつづけたり。

(鉢巻男)「これ鉄や、あの稲いせ屋の娘をしつてゐるか。おうたといふが、い、がきだナア」

白後は京都を出立して、神々より授かりし千両の金は道中不用心ゆへ先へくだし、その身はひとり下り、月日きなり思ひの外はやく江戸の地へつき、高なは迄来り、折ふし石尊参りにてにぎやかなり。

(菅笠の男)「はんごん丹のにほひがするは、是は牛の糞だ」

〔絵〕 高輪に着いた白後。



二オ

〔二オ〕 まだ日も高ければふらりとゆくほどに、新橋こへて信楽

や、ゑびす屋かめ屋うち過ぎて、はや京ばしに伊勢やが見世、右をよぎればふしみの奈良茶、かのこまだらにやせた大きやんと名のつく町抱へふんとうにものし、へむねのやけるまじないか、うめ屋が餅は雪をあざむく。香炉峰みすやが針も、棒ほどな橋のたもとにすめの餅、喜八が床もにぎやかにしばやが見世のねち上戸、おまへに中はしごのどけき日和、鳥がなくなつてま屋といふ名代娘の茶屋へこしをかけ、しばらく休みけり。

(白後)「もふ何時じやの、ア、しんどいく」

(魚屋)「けふはきついしけじや」

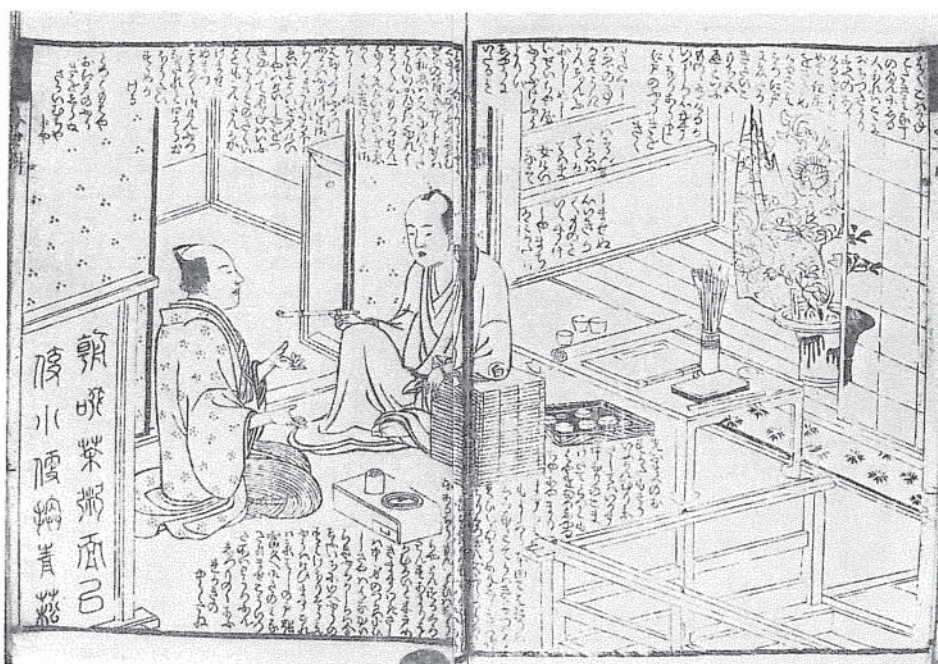
〔絵〕 中橋の茶見世あづまやに憩う。

〔二ウ三オ〕 白後はかねてたきはな丁の辺に知る人あればこ、に落付き、売掘のありけるをもとめて住居をさだめける。又其ころ江戸に名高きといひ持五通といふ者の有けるが、いつしか心やすくなり、あらまし江戸の風儀を聞く。

(五通)「わたくしは絵の事は存じませぬが、先うき世絵は心いきが肝心、筆でかくものと思しめしては参らず、傾城・茶屋女・芸者・町風・武家風など、髪かたちより衣裳にいたる迄、情のうつるよふに工夫が肝心、絵は無声の詩とやら申せば、大和絵は声なきうたともいふべきなれば、とかく心もちが専一なり。先けいせいを急ぐには吉原を御覧じねばならず、ふか川ふうは深川を御覧なされ、似顔絵は芝居を見、芸者は芸者をつきやつて見ねば、衣服調度のたぐい迄も魂胆がかけませぬ。まづそろく御見物なされ、と口から出ほうだいす、めかけける。

(五通)「先おまへのお姿も、そういふ冠下地ではいかず、中おりの駒下駄で、とつと最早を仰有るぢや謝ります。髪も吉原本田で羽織は黒な、こで上着はやつぱり鳶色ちりめん、下着は鴨ちり黒出八丈風通のたぐい、これはいつでも草双紙にある注文、帯は白茶どんす

か黒どんす、あまり幅が広いと木戸めきます、脇さしは中身の柄は

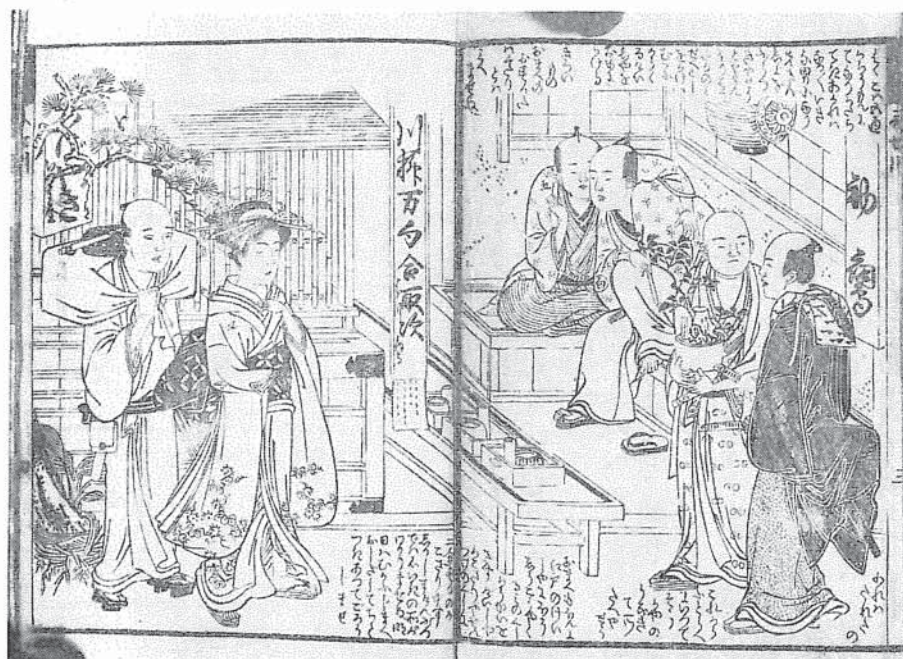


二ウ
三オ

小びし、鞘はなかいらぎ、ふちがしらは金しふいちに家風のすみ
毛彫、宗珉風は下卓ます。これは京橋の戸張富久へ御たのみなされ

ませ。こういった所はどうか紛失もののお触書のやうだね。」
(白後)「とつともはや、お江戸の風儀を知らぬさかい無茶じや。」

注一、「開帳利益札遊合」にも「扇谷滝花町」とある。芸者の多く住む橋町
のもじり。



三ウ
四オ

注二、吉原の太鼓持、大坂屋五丁のもじり。「五町と万里と……よびにやつてくたせへ」(総鐘)

〔絵〕 絵の道具をならべた新居に五通が来て講釈する。白後の髪形は古風な冠下地である。

〔三ウ四オ〕 白後は五通が注文にてなりかたち出来あがれば、なか／＼意気な男になり、先近所をふらつきやせうと、薬研堀はつ鷹の見世へ腰をかけ、向ふから来る芸者をお目にかける。

(五通) 「きついもの、お前のお姿は下りとは見へませぬ」

(右端の男) 「あれは誰だの」

(坊主頭の男) 「これから不動へ参つて草加屋の鰻で一ツたべやせう」

(五通) 「おまへもほんに、江戸の芸者にほうしうこうやくるみの櫛かうがいなさす芸者がござりやせん。つげの櫛に二分するのがござります。しかし素見物では心いきの所がわかりませぬ、明日は向島へおし出して、ちとつき合つてごろうじませ。」

〔絵〕 薬研堀不動の縁日に初鷹に休む二人。外を武士客と太鼓持が通る。向うから来るのは芸者と供。初鷹の入口に川柳万句合取次とかいた看板が吊してある。(京伝は天明二年の『教訓蚊の呪』と『五郎兵衛商売』にもこの看板を描いている)。白後の髪形も現代風に一変。

〔四ウ五オ〕 (五通) 「今日はいつ日だの、廿八日か、尻つたぐり御用心といふ日だの。もし白後さん、さいわい今日は月並の紋日でござりやすから、すぐに御見物といふ所がよふござりやせう」

(白後) 「江戸ぶしは早く聞きたい。五通子、一中節はどうだ」

(芸者甲) 「柳ばしの太夫さんを錦絵にかきやしたが、とんだよく似ていやすねへ」

(芸者乙) 「此ちうお前の配りを見やしたが、とんだよく揃つたね。」



〔注四〕 絵は花藍、彫りは長者町の中出かへ」
(五通) 「いんや岡本だつけね」

注一、尻はしよりの意。芝全交の寛政五年の作に『今日は廿八日、尻たぐり

四ウ
五オ

(注二) 京町でも誰が袖と若松さ。中近では半婦とみやこじでもつていやす」

・いねや女房おむね。

(五通)「白後様、今はんは松が屋になさりませ。

(お宗)「仙里様、よふおいでなさりました。おひとりかへ」
仙里「市川やの平は見へなんだか」

注一、松が屋―松葉屋。注二、京町は大文字屋の異名、誰袖若松は『諸都酒美選』に入る。注三、中近江屋の異名。天明四年の細見では半太夫が二位、みやこじが三位の遊女。注四、かなの井「わつちや仙里さんが来なんすはづだから、待つていゝす」(他不知思染井)

〔絵〕 中の町の茶屋(のれんは、いの字伊勢屋)の見世先。

〔六ウ七オ〕 こ、に松が屋の瀬山とてくるは第一の全盛、突出しより出た事なく、名代は数しらず、大評判にて松が屋の掘出しなり。白後は此せ山を買い大きにうはになり、今は古方家で下しても当分の本復とは見へず、のちにぞ思ひしられたり。

(五通)「れんじから、こふ月のさし込む所は又日本でござります」

(蘭丈)「おちへさん、ほめ言葉をお頼み申やス」

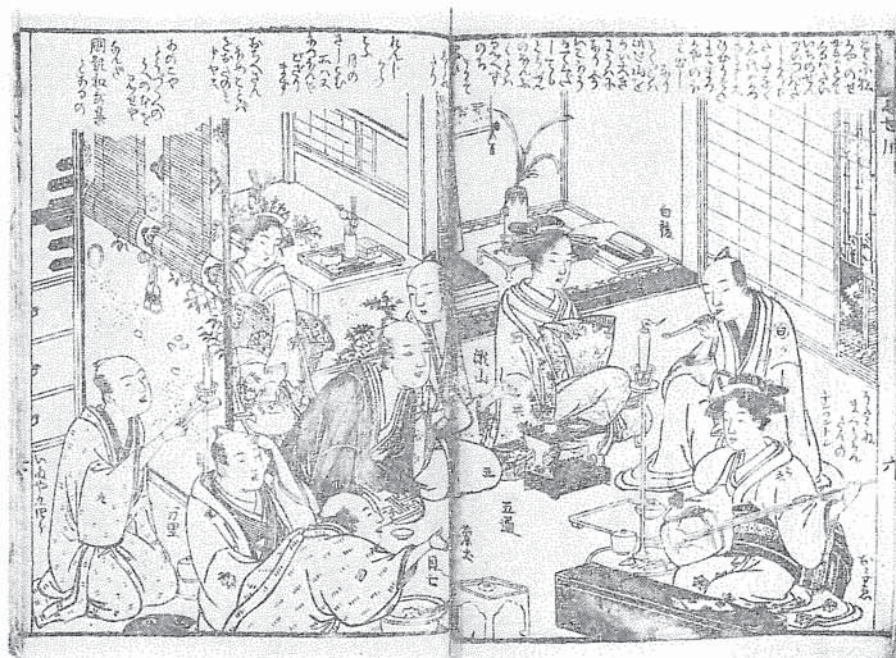
(おちへ)「うた、ねまくら邸の、チンツントン」

(瀬山)「あの子や、唐づくへの上の本を見せや」

(?)「なんだ、明題和歌集とあるの」

注一、三年春細見、松葉屋の一位。「当時くるわ」ばんの名とりなる事みな様ご存じ」(他不知思染井)。注二、十寸見蘭洲。「蘭州の人マスマシ」(此奴和日本)。注三、吉原の女芸者(不案配即席料理)

〔絵〕 瀬山の座敷、男女の芸者が五人集まっている。目七は大ざつま目吉のもじり。



六ウ
七オ

〔七ウ八オ〕「たゞ小袖ともか、ず、身の代衣と書きたるは」と自然居士のうたい物に書きたるも、昔より色里へ来る者は親兄弟主人のためにも身を売らる、事ぞかし。「世話になるのを姉とい、憂きを語るを妹とて」といふ文句の通り、便りとする人とてもなく、おみなへしの

一時をくねるうらみも男山の昔を思ひ、心ひとつに二世までと誓いし男に、いつかくるはを離れてほんにと、指おって待っているのも先の知れぬ事、「おくつて出やんす肌うすの」といふ仲もつひ二丁目や、京町あたりにをもしろい事ができるといたちの道、どうでも男は悪性ものだ。

(注二)「松人さんにさう申て、行成さんが来なんしたら、草双紙を貰いんしやう。大門の蔦屋へとりにやりんせう」

(いさ山)「さんこうさんはじれつてへ人だよ」

(かなの井)「京ばしへ文を出しんすよ。哥之介さんもお出しなんすだろうね」

(川急)「べゆふのくきやは、ないすかなくきやだね、おもいれ寐てつかはしんした」

・白後は聞いている。

・あの逆言は神代のじぶん、深川ではやつた。

(哥之介)「わつちらア色事と土用ぼしやアした事がおつせん。芝居へいつたは九月の廿八日だつね。すこし雨がふりんしたよ。和泉

やの一座さ」

(ざん山)「あの時アひいきの太夫さんが出なんせんで、いさ山さんはお力落しさ」

注一、矢明三年春の細見では松葉屋の二位、四年には一位。注二、朋誠堂喜三三の俳名月成のもじり。この年は蔦屋から黄表紙を三種出している。なお恋川春町の『吉原大通会』に、すき成と菊葉屋の菊の戸（松葉屋の松人のもじりか）の仲を暗示している。注三、北尾三次郎政美、号杉卓をさすか。注四、京伝自身をさすか。注五、天明三年細見では四位。なおこの遊女たちは、ゑ山は四年細見六位の染山か。いさ山（みさ山）は三年細見新造の十三位。かなの井（花の井）は三年細見新造二位。注六、「もうさかことも古いね」（他不知思染井）。注七、林山。三年細見新造の八位。「おりんはざん山と名を交へ同じやうにつとめをする」（他不知思染井）。京伝が愛した女で、



『艶本枕言葉』に「京伝さん、おめへ松印の林山さんとかいふうつくしいな
じみをこしらへたのくとある。注八、富本豊前太夫をさすか。天明二年秋中
村座の「浄るり新曲高尾懺悔、富本豊前太夫にて所作。一座評判よし」（歌
舞伎年代記）。

〔絵〕 哥之介の座敷。



八ウ
九オ

「八ウ九オ」 白後は瀬山になじみ、わづか千両に限つたる金を百万両もある気になり、又瀬山もすかぬ客とは思へども、いったい人をさらさぬ気性ゆへ、相応につき合つてをきけるほどに、折ふし月見を仕舞わんと、いね屋九四郎五通を呼び相談する。

〔白後〕「待宵、月見、十六夜と三日しまつてやろう。なんでも大層にしてへもんだ」と上方ものに似合はぬ、とんだかんしやく持なり。

〔いね屋〕「しかしそれはきついおむだでござります。やつぱり長行つてつかはさるがい、のサ」

〔白後〕「なんとい、じやアねへじやアねへか。たゞしわりいか」

〔五通〕「ア、おつしやるから、しかたがねへ」

松が屋は瀬山が月見にて、鳥大じん此かたの大さわぎ。飾り物は紅葉の造り花、白じゆすの煙草入、きせる筒を式紙短冊にさげ、下は菊のくわしらん、瀬山はねじとうかと思われ、もみぢ狩のよふでもあり、白後は穆王と維茂を二役の心いきでしやれている。

・喜六

〔声〕「でんべどん。こどもや、でんべどんをよんでくりや」

〔禿〕「あいゝ引」

注一、『蜘蛛の糸巻』茶番の項に「〔前略〕一座絶倒せざるはなし。扱五町かたちを改め出づれば、跡より大きな三方へ蒲色びろふどにて作りたる煙草入、同じきせる筒へきせるを入れ、うち違ひにとちつけて才槌と見せたるを大三方へ積み上げしを前に置きて、五町が口上に、是は何様の茶番なりと面白く口上をのべ、三方なるを総景物とて連中へ禿にくばらせけり」。

〔絵〕松葉屋の一室。軒先に煙草入がつるしてある。

〔九ウ〕初会より月見迄の諸入用、やり手・若い者・太鼓持の祝儀惣べて九百九十九兩二分、千両が二分ぬけと書付けをもつて、いねや九四郎うけとりに来る。

・白後はせんかたなく神々より授かりし千両を箱のまゝにて渡す。

廿日あまりに四十兩つかつた者はあるが、千両箱に二分のつりと、さりととは二分のちうげんだ。上方へは帰られず、つまらぬ身の上になつた。

〔白後〕「箱の代を一匁ばかりおいていかつせへ。見倒しに見せても



九ウ

百五十がものはある」

(いね屋)「これも皆わたくし方へはいる金なら二朱と三朱はまけてもあげませうに、とんだお気の毒でござります」と商売に似やわぬかたい挨拶なり。

〔十オ〕 白後はほう然としていたりしが、ふしぎや虚空に音楽きこゆると思ひしは松永の長唄にて、紫の雲ひわ茶の雲くろとび憲法小紋の雲なぞたなびき、廓の人々あらはれいで申けるは、「われこそまことは五大力明王のうち北方夜叉明王なり。かりに五通と変じ汝がのぞみを叶へしなり。瀬山と見へしは普賢菩薩、いにしへ江口と現じ西行を済度せし事あれば、傾城の仕うち中村里江より上手なり。九四郎と見へしは九頭龍権現、まん里は八幡宮、目七は目黒の不動、おちへは文殊菩薩、これ文殊の智慧といふ縁によつてなり。」

「狂言の筋書は此千手観音さ」と千の御手ごとに髭をなで給ひしより、是ひげなのではじめなり。手があるといふも此事なり。又くるわのことばに太鼓持を神とい、又末社と、女房を神さんとい、お祭が



十オ

つかへたといふも、此時よりのはじまりなり。いよ／＼画道をはげむべしと、北の方へ去り給ふ。

注一、『伊波伝毛乃記』に京伝は松永某に長唄を習つたとある。なお天明三年秋市村座の京鹿子娘道成寺に、長唄は松永忠五郎(歌舞妓年代記)とあるし、京伝の「手拭合」に長唄染として忠五郎の唄の一節が手拭の図案になっている。

〔十ウ〕 白後は仏神の御しめし、あら有難やと思ひしは夢にて、千両の金を授かりしも、東へ下りしも、いきな男となり吉原にて全盛をつくしたるも、又神々のおしめしを受けたるもみな夢のうちに、起上つて見ればやはりわが家ゆへ、はじめは夢のよふではなかったが、又ゆめか久しい物だと、白後はもちろん作者・絵師・本屋・板木屋迄ゆめとともに興をさましける。

大和絵は人の心を和らげ、花になく鶯、不見済不買とは本屋の禁句、白後は大和絵の名人となり、にせ川すきのぶと名を改め、客人女



十ウ

郎という書をあみて今の世までもい、伝へたる事は、後編にお目にか
けませう。よって此巻の外題にしろしました。
(白後)「ア、モウなん時だしらん」

注、翌年正月新版の『他不知思染井』をさす。
京伝作 画工 北尾政演